

【研究ノート】

## チョムスキーの慶応大学講演について

On the Syntax Session by Noam Chomsky

菅野 憲司、富野光太郎  
KANNO Kenji, TOMINO Kotaro

**要旨** 2014年3月8日、慶応大学において掲題の講演会が開催された。生成文法は多くの議論を巻き起こしつつ、初期の「句構造理論」から今日の「ミニマリスト・プログラム」による「併合」と「移動」の理論へと変貌してきた。本稿では、慶応講演とChomsky (2015)を参照しつつ、生成文法によって古典語がどのように記述できるかの検討を行った。

### 1. はじめに

2014年3月8日慶応大学にて、大学院レベルの統辞論の研究者を対象にした、ノーム・チョムスキーMIT名誉教授（以下チョムスキー）による「生成文法の統辞論の講演」が行われた。（本講演は、<https://www.youtube.com/watch?v=u0t34c3W8d0>のリンクにて、アクセス可能である。慶応大学に感謝申し上げたい。）内容を概観すれば、次の通りである。前半は統辞論の講義、後半は具体例を用いての説明である。

- 前半
1. 生成文法と言語の核にあるもの
  2. 移動 (Move) と併合 (Merge)
  3. 連続的循環 (Successive Cyclicity) と停止問題 (Halting Problem)
  4. 拡大投射原理 (EPP) と空範疇原理 (ECP)
  5. 虚辞の主語 (Expletives) とフェーズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition)
- 後半
1. 目的語の繰り上げと例外的格表示 (Exceptional Case Marking)
  2. 主語の繰り上げと $\gamma$ について
  3. 主要部 (Head) 移動とWh疑問詞の移動
  4. EPPとECPは同一原理に由来する
  5. 併合 (Merge) と最小演算 (Minimal Computation)

生成文法は、今日まで約60年の歴史がある。この間、初期理論に都度改訂が加えられ、1990年代から「ミニマリスト・プログラム (Minimalist Program, 以下MP)」による「移動」と「併合 (以下Merge)」の理論が提起されている。イタリア語、日本語などの他、ドイツ語、オランダ語などの印欧語、ヘブライ語などの中東語、中国語、朝鮮語、インドネシア語などのアジア系言語にも研究の広がりを持つようになってきている。

「人間は生得の言語能力を持つ」という仮説を立て「人間の脳内にある人類共通の初期言語の原理」と「個別言語の獲得過程」を演繹的に解明しようと試みる生成文法は、それ以前の「個別言語の文法総覧を作る言語学」とは様相を異にしている。研究者は、仮説に事実を照らし合わせ、考察を加え、その作業を繰り返すことによって、その理論を新しくしている。従って、完成されたものとして生成文法を学習していくと、そのめまぐるしい

変化に翻弄され、永久に理解できないことになる。つまり、理論を作る側に回れば生成文法の何たるかがよく体得できる仕組みになっている。本稿が誕生する契機となったのは、掲題の慶応大学講演と本学の文学部言語学公開講座〔註1〕である。

## II. 慶応大学Syntax Sessionに関する考察

講演の後半に取り上げられている主要例文とChomsky (2015)〔註2〕のそれに関連する部分を引用して考察する。考察に用いる言語は、主に、英語、仏語、古典ギリシア語、古典ラテン語（後者二言語を以下「古典語」という）、中国語、日本語である。

### 考察1 目的語の繰り上げと例外的格表示について

講演の例文

- a. [The boy [v\* [saw the dog.]]] (動画；35:06)〔註3〕〔註4〕
- b. [The boy [v\* [the dog [saw t.]]]] (動画；37:14, the dogのIM)
- c. John expected him to leave. (動画；39:18)

Chomsky (2015) p. 6 に次の記述がある。

“X’-theory radically simplified PSG, eliminating many stipulations, but also introduced a new one: that constructions are necessarily endocentric. That was an error, I believe, for reasons discussed in POP. In fact, exocentricity is common, including all cases of IM and many others. Considerable artificiality and complexity have been introduced in the attempt to impose endocentricity. Accordingly, there is no notion of SPEC, though I will continue to use it for expository purposes, along with some other familiar notions, like trace.”

〈試訳〉

「Xバー理論はPSG (Phrase Structure Grammar: 生成文法初期の句構造理論) を簡素化した。文の構造が必然的に内心的 (Exocentric) であるという規則をも導入してしまった。しかし、これは間違いであったと私は信ずる。理由はPOP (Chomsky (2013)) に述べられている。事実、IM (Internal Merge: 内的併合、以下IMという) やその他事例のすべてを含めて、外心性 (Exocentricity) が普通であるからだ。内心性 (Endocentricity) を課したので、IMその他に、かなりの人為性や複雑性を持ち込んでしまった。従って、SPEC (Specifier: 指定部) の概念はない。Trace (痕跡) の如き慣れ親しんだいくつかの概念と共にそれを説明用として使い続けるけれども。」

古典語にSPECやTraceが存在していないように思われるのでこの新提案に違和感はない。そして、抽象的軽動詞v\* (動詞の機能範疇の性質) を言語の構造分析に導入したこと、これも支持する。複雑な動詞の語尾変化として古典語にもv\*が顕在化しているように思われるからである。今後、動詞に限らず、名詞のN/n\*、形容詞のA/a\*、冠詞のDet/det\*が文の構造の分析に於いて有力な統辞論的概念になって行くと思われる。但し、v\*の位置については、更に検討を要すると思われる。何故なら、古典語のφ要素 (人称、性、数、格など) の動詞の接辞は語尾に位置しているため、動詞の前ではなく、後に持ってくることも可能ではないかと思われるからである。研究課題として残しておく。

さて、例文a.と例文b.で、目的語 (対格) の移動について述べられている。

Chomsky (2015) pp. 6 - 7 に次のような説明がある。

“Crucially, LA does not yield a new category as has been assumed in PSG (Phrase Structure Grammar) and its various descendants, including X’-theory. Under LA, there is no structure [ $\alpha$  X], where is the label of X. LA simply determines a property of X for externalization and CI. It is therefore advisable to abandon the familiar tree notations, which are now misleading. Thus in the description of an [XP, [YP, ZP] structure, there is no node above either of the two merged constituents. There is no label for the root of the branching nodes.”

〈試訳〉

「非常に重要なことだが、LA (Labeling Algorithm) は、Xバー理論を含めてPSGやその他いろいろな派生規則で想定されてきた様な、新カテゴリーを作りだしていない。LAの下では、ラベルXになるような [ $\alpha$  X] という構造は無い。LAは単純に外在化やCI (Conceptual Interface: 概念インターフェイス) のために、Xの特性を決定する。それ故に、慣れ親しんだ樹形図表記を放棄するようにアドバイスする。それは、誤解を招くからである。従って、[XP, [YP, ZP]] 構造の記述には、併合された二つの構成要素のどちらの上にも節点 (Node) がない。枝分かれ節点の付け根のためのラベルはない。」

ここでは、新カテゴリーを導入せず、LAのラベル照合操作のみによる新たな英語の「移動」の記述が提案されている。しかし、前述した通り、v\*の位置はsawの後の位置でも良いはずである。もしそうであれば、旧理論のXバー理論で意味解釈されていた基準の位置でラベリング出来るということになる。やはり、「v\*の位置は何がその決定要因になっているのか？」という疑問が生ずるのである。講演の文脈から考えて、例文a.b.については、英語の受動化 (Passivization)、名詞句 (NP) の繰り上げ (Raising)、Wh疑問詞の移動、関係詞節形成 (Relativization)、疑似分裂文 (Pseudo-cleft) などの第一段階の説明なのであろうと考えて置く。

例文cは、現代英語のみならず古典語にも存在する対格不定法表現である。古典ギリシア語には、英語と同様の対格不定法の用例がある。不定法の意味上の主語は、英語と同様、ふつうは対格で表す。しかし、英語と異なる点がある。即ち、「不定法の意味上の主語が主文の主語と同じ場合にはそれを照応形の主格で表したり」、或いは、「省略したり」する。省略しない場合は、強調になる。つまり、古典ギリシア語では、不定法の主語に「主格」が出現することがあったのである。一方、主文の主語の人称代名詞の主格については、顕在化させないことが多かった。例文を示す。[註5]

原文：ν ο μ λ η ζ ω α υ τ ο ς σ τ ρ α τ η γ ο ς ε λ ν α λ ι .

直訳：Consider myself (主格) general (主格) to be.

英訳：I consider myself to be general.

日本語訳：私は自分自身が将軍であると思う。

この例文では、主文の主語は省略されている。不定法の主語と補語は主格をとる。次に、典型的な対格不定法の例文を以下に示す。対格は省略できない。文型をどのように変えても、文の意味は変わらない。とりわけ不定法部分のフェーズ (Phase: 文排出の単位) の「主語+動詞+補語」の順序は、繰り上げ (Raising) という特殊な操作ではなく、順列組合せの構造でしかない。例文を示す。

原文：ν ο μ λ η ζ ω α υ τ ο ν σ τ ρ α τ η γ ο ν ε λ ν α λ ι .

直訳：Consider him (対格) general (対格) to be.

英訳： I consider him to be general.

日本語訳：私は彼が将軍であると思う。

不定法部分の文型を変えた例を示す。いずれの文も成立する。

1. νομινηζω ελιναλι στρατηγουν αυτων.

= consider to be general him.

2. νομινηζω στρατηγουν ελιναλι αυτων.

= consider general to be him.

3. νομινηζω αυτων στρατηγουν ελιναλι.

= consider him general to be.

(順列組合せの残りの3例は紙面の都合で省略する。)

更に、この程度の構造の文であれば、主文の動詞を含めてどのように文型を変えても、文は成立する。一例を示す。

< αυτων στρατηγουν νομινηζω ελιναλι.>

< him general consider to be.> (主語 "I" はオプション、どの位置でも挿入可)

つまり、不定詞句の内部の統語対象物 (Syntactic Objects) と主文の動詞は、どの位置に置いて文が成立する。これを生成文法の「移動」理論で記述するのは困難である。

#### 考察2 存在のThere is構文と主語について

講演の例文 (\*印は非文、以下同様に表記する)

d. There arrived the man. (動画; 44:05)

e. \*Arrived the man. (動画45:02)

例文d.については、the manが主語である。[註6] 主語が無いのではない。倒置されているだけである。例文e.は、講演では、「英語では非文であるが、イタリア語であれば正文である。」と述べられている。しかし、これも文型が「動詞+主語」であるため、英語の文型になっていないだけのことである。主語はある。講演で述べられている「イタリア語には主語が無い」というのはどういうことか? デカルトの有名な言葉のラテン語訳で示す。仏語の原文で “Je pense, donc je suis.”

日本語で「考える、故に、われ在り」

英語で “I think therefore I am.”

ラテン語で、“cogito ergo sum.”

cogito: 第一活用動詞・直説法・現在・能相・一人称・単数。

sum: 不規則動詞 (英語のbe動詞) の直説法・現在・能相・一人称・単数。

どちらも場合も、動詞の活用語尾で主語が分かる。その一方、主語を入れることもできる。強調の意味になる。主語は、オプションであるということに過ぎない。

#### 考察3 「移動」について

講演の例文

f. The boy saw which dog? (動画; 54:46, which dogの基準位置)

g. [ Wh [ the boy [ v\* [ which dog [ saw t?]]]] (板書; 途中経過)

h. \*Which boy do you wonder if likes the dog? (動画; 59:55, 非文)

i. Which dog do you wonder if the boy likes? (動画; 01:03:05, 正文)

連続的循環 (Successive Cyclicity) について、Chomsky (2015) p. 6 に、次の説明がある。

“LA is trivial for {H, XP} structures, H a head. In this case, LA selects H and the usual operations apply. The interesting cases are {XP, YP} neither a head, in which case LA finds {X, Y}, the respective heads of XP, YP, and there is no label unless they agree. In this case, the label is a pair of the agreeing elements. An element raised by IM to create this structure is in what Rizzi calls a “criterial position.” It follows that IM is successive cyclic, driven by labeling failures, continuing until a criterial position is reached.”

〈試訳〉

「LAは、{H, XP} の構造では取るにたりない問題である。LAはH(Head: 主要部) を選択し通常の操作が適用される。興味深いケースは、{XP, YP} の、どちらも主要部でない場合、LAはXP, YPのそれぞれの主要部{X, Y} を探す。そして、それらはAgree(照合)するまでラベルが無い。この場合、ラベルは照合要素のペアである。この構造を立ち上げるためにIMにより繰り上られる要素は、Rizziのいう一つの基準位置 (Criterial Position) にある。そして、ラベリング欠如が動因となり別の基準位置に到達するまで継続して運ばれ、IMは連続的循環となる。」

つまり、連続的循環により、フェーズの中のNPやWhはラベリングされるために繰り上がり、最終的に周縁部を越えて文頭に繰り上るという。Chomsky (2015) pp. 8-14に移動の骨子が述べられている。(略)

「移動」とは何か？それは「定着」に対立する概念である。「定着」が無ければ、「移動」は無い。生成文法理論では、この二つの対立概念による捉え返しがなされていない。では、現代英語の文型の「定着」は、いつ起こったか？ここ400-500年程の間に起こった。[註7]

それ以前は、どうであったか？「定着」はなかったように思われる。近代英語以前の古英語*Beowulf* (AD 6c-12c) の平叙文には、主節ではSVOが好まれたものの、SOV, VSOの文型があった。従属節ではSOVが原則であった。[註8] 紀元前5世紀の古典ギリシア語では文型の「定着」がなく、紀元前80年～紀元後14年頃の古典ラテン語でも好まれる文型はあったものの「定着」はなかった。この視点は、チョムスキーには全く欠けているように思われる。古典語に於ける語彙は、生成文法の用語でいえば、「 $\phi$  featureを備えたN、 $v^*$ を備えたV、 $\phi$  featureを備えたA、 $\phi$  featureを備えたDet、その他P (前置詞)、Conj (接続詞) など」を意味する。

5～10万年の歴史を持つホモ・サピエンスの言語や言語獲得能力の全貌を明らかにする理論であれば、現代諸言語の他、歴史的言語についても妥当な記述と説明が出来なければならぬ。では、どのように考えれば英語の真の姿が記述できるのだろうか？一旦古典語に戻って現代英語に至るまでの歩みを振り返ってみる。

第一段階：紀元前500年頃～、古典語の単文の文型はランダムであった。複文の従属節の内部も同様であった。一方、曲用・活用は現代語より遥かに複雑なものが存在していた。古英語の文型は、まだ完全にはSVOが「定着」していなかった。従属節はSOVが原則であった。

第二段階：14世紀～、英語に於いて、以下の文型が定着した。

平叙文：主語＋動詞＋目的語の文型。主節と従属節の如何を問わない。

疑問文：動詞+主語、或いは、助動詞+主語+動詞の倒置による文型。

副詞が文頭に来る文：副詞 (never, only, now, then, here) を文頭に持つ文、及び、存在文 (there is構文) のときに動詞+主語となった。

曲用・活用の語尾を、辞として分節化したり、文型に担わせたりすることにより簡素化した。

第三段階：18世紀、現代英語の骨組みがほぼ定まった。否定文のdoは16C前半までは稀であったが、18Cには確立した。疑問文のdoは、13C末から起こっているが、16C前半までは稀で、18C以降一般化した。[註8]

現代英語には、古典語時代から変わらぬ構造と、異言語との衝突によって生み出された新しい構造とが混在している。これは、整理して分析されねばならない。There is構文の例で考えて見る。嘗て古典語では、動詞と副詞は文中のどこに置いてみても許されていた。名詞は、主格を使えば、主語は文頭に限らず文中の何処に置いてみても良かった。省略しても良かった。現代に残っているthere is構文は、通時言語学的に見れば、14世紀に存在文として、文頭の位置が “There is a book on the table.” の如く「定着」し、その次の位置に “a book” の主語が「定着」したのである。そして、そのまま変化せずに、現在まで残っただけのことである。一方、存在文ではない通常文の副詞のthereについては、依然、どの位置に置いてみても良かった。生成文法では、嘗て、通時言語学を「世代間のパラメーターの変化」と捉えて説明する手法が開発されていた。[註9] これを用いれば、「第一世代の大人の発話例が多ければ、第二世代の子供のUG獲得のためのinput量が増え、その文型が残る。その逆であれば、その文型は消える。」と説明できる。ここでは、言語衝突などによりこの文型が生まれ、使用頻度が高かったので残ったと考えておく。

これ以外にも、英語の古典期の古い文型や表現が現代に残って、その説明が困難になっている例がある。例えば、all the people, too tall a boyは、なぜthe all people, a too tall boyの語順にならないのか？生成文法ではこの説明に苦慮して音韻論的な解決策を模索しているようである。その解決の指針については、[註10] を参照されたい。

#### 考察4 「EPPとECPは同一原理に由来する」について

EPPとは「拡大投射原理」、ECPとは「空範疇原理」のこと。LAの素性照合による「移動」がなされることにより、従来のX-バー理論の時代と異なる解釈が可能となった。そのためEPPとECPは、同一原理として纏められることになったという。ここでも、やはりv\*の位置が問題になるように思われる。v\*とNP・WhのIMが前提とされるからである。

#### 考察5 “Pseudo-Move On/Off” 理論の提案

「移動」とは何か？の説明として、“Pseudo-Move On/Off” と名付けて、「新説」を付け加えておきたい。Successive Cyclicityを、よりよく記述できると思う。

電車の駅のプラット・フォームの「足元注意の電光表示の点線」を思い起こして頂きたい。プラット・フォームに立つと、点線が点滅しつつ進行方向に進んで行くように見える。しかし、実際は、一つ一つの点は動いておらず、それぞれの点はその場で時差をおいて点滅しているだけである。生成文法の「移動」は、この点滅を「移動」と断定しているように思われるのである。つまり、文の或る構成要素、例えば、Wh疑問詞がABCDの位置で

自由に点滅していたとする。それが、ある日突然、点滅を止め、その要素がAの位置のみで点滅するようになった。Aの位置のみ輝いたらどう見えるか？先頭の位置に移動したように見える。言語の史実を振り返ると、「英語では、先頭のAが残りその他のランダムな文型が消えた」ことを示している。消えた理由は、とりあえず「英語が歴史上何度も異言語と衝突したこと」と「世代間のパラメーター変化」を挙げ、仮説としておく。日本語では、現在でもまだ、疑問詞がA~Dの位置で点滅して且つ発音されている。この理由は、「日本語は、歴史上異なる言語との衝突が英語程多くなかったことによる」と仮説を立てておく。[註11] このように分析すれば、NPの繰り上げ、Wh疑問詞の繰り上げなどは無用となり、「統語対象物の繰り上げの原動力は何か？」の究明も不必要となる。以下で更に検討する。

#### 考察6 古典語について生成文法で何が言えるか？

##### (1) 構造と文型について

古典ラテン語を観察すると、古典ギリシア語と同様、「移動」理論の対象となる事例が存在しない。従って、まず、文型について考察する。下記の例文 (a) (b) に使われている3語の単語は同一で、MaryとJohnの位置のみが変わっている。

(a) [Mary] [likes John].

(b) [John] [likes Mary].

英語は、単語の位置によって意味が変わる。(c) を (d) (e) (f) の文型にすると非文になる。

(c) John met Bill.

(d) \*John Bill met.

(e) \*Met John Bill.

(f) \*Met Bill John.

現代英語ではSVOの文型が定まっているからである。一方、古典ラテン語では、下記の4つの例文は何れも正文で、「少年が少女に会った」と言う意味である。[註12]

1. puer occurrebat puellam. (=Boy met girl.)

2. puer puellam occurrebat. (=Boy girl met.)

3. occurrebat puer puellam. (=Met boy girl.)

4. occurrebat puellam puer. (=Met girl boy.)

文頭に来る語は強調されるが、普通名詞には主格・対格の語尾変化があるので主語と目的語がどの位置に来ても、文の意味は変わらない。集合 (SET)  $K = \{X, Y, Z\}$  の順列組合せが起こっているだけである。主格puerを疑問詞quis (=who) に置き換えれば、どの文型でもそのままWh疑問文になる。このWh疑問文はIMに従っていない。「定着」が無いのだから、「移動」もない。あるのは、「移動」以前のランダムな順列組合せである。つまり、例文1.では“Nn\*+Vv\*+Nn\*”の構造になっており、例文4.では“Vv\*+Nn\*+Nn\*”になっている。“n\*”と“v\*”が何処に来るかによって“N”と“V”の位置が決まって来るように思われる。形容詞についても“A/a\*”であるので文中の何処にでも出現する。更に、ラテン語には冠詞がないが、古典ギリシア語には定冠詞“Det/det\*”がある。従って、“Det”も文中の何処にでも出現する。現代英語では、普通名詞の“n\*”と一般

動詞の“v\*”がほぼ消滅しているので定位置しかなく文型が「定着」している。

参考までに、人名など固有名詞、例えば、Vergilius (ヴェルギリウス)にも格変化(名詞第二変化)があったので示しておく。現代語では消滅しているが、呼格があった。思考のためには特段の働きをしないが、コミュニケーションには必須の格であった。

	主格	呼格	属格	与格	対格	奪格
単数	Vergilius	Vergilie	Vergilii	Vergilio	Vergilium	Vergilio
複数	Vergilii	Vergilii	Vergiliorum	Vergilis	Vergilios	Vergilis

名詞には、第一変化～第五変化までの五種類の曲用があるが、割愛する。

(2) 文と文との関係：受動文の目的語の繰り上げについて

(g) Mary loves John.

(h) John is loved by Mary.

古典ラテン語の受動相の活用は、be+過去分詞の二語による迂言法ではなかった。単語であった。下表参照。

英語Loveの直説法現在形の活用

	能動態		受動態	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	love	love	am loved	are loved
2 人称	love	love	are loved	are loved
3 人称	loves	love	is loved	are loved

ラテン語Amare (=love) 直説法現在形の活用

	能動相		受動相	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	amo	amamus	amor	amamur
2 人称	amos	amatis	amaris,-re	amamini
3 人称	amat	amant	amatur	amantur

能動文：puer puellam amat. (=Boy girl loves.)

名詞(主格) + 名詞(対格) + 動詞(直説法・現在・能動相・三人称・単数)

文型をどのように変えても文は成立する。英語では非文となる文が正文とされる。

受動文：puella a puero amatur. (=Girl by boy is loved.)

名詞(主格) + 前置詞 + 名詞(奪格) + 動詞(直説法・現在・受動相・三人称・単数)

文型をどのように変えても文は成立する。但し、a puero (by boy) は前置詞句でEM (External Merge: 外的併合) である。

Girl is loved [e]. (=puella amatur. 或いは, amatur puella.)

生成文法では、[e] はGirlの痕跡として説明されているが、古典ラテン語では、痕跡が見当たらない。受動文は、“amatur puella. (=be loved girl).”で「少女は愛されている。」と言う意味になる。百歩譲って、もし痕跡があるとしたら、どの位置を痕跡と定めても

よく、文が痕跡だらけになる。これでは、收拾がつかない。では、どう考えれば良いのか？実は、痕跡はないのである。つまり、現代英語の平叙文では、

- ① SVO、即ち“Nn\*+Vv\*+Nn\*”の文型が定まっており、
- ② 「be動詞+過去分詞」の迂言法で受動態を作り、その上、
- ③ 名詞の“n\*”の消滅により能動文の目的語(=対格)が主格と同形となったので、
- ④ その目的語が受動文の主語にそのまま移動しているように、見えてしまっているだけのことである。これは、名詞が主格・対格同形をとる英語特有(仏語もそうであるが)の現象であると思われる。チョムスキーの「Traceは、説明のための便宜的な用語である。」という発言は、この意味であれば支持できる。

(3) 英語の「Be+過去分詞」は、元々「完了表現」であった。[註13]

**考察7** 「音調による疑問文」について何が言えるか？

古典ギリシア語(現代ギリシア語に於いても)のyes/no疑問文は、平叙文とその構造が同一である。同一の文が音調の違いで平叙文になり疑問文にもなる。また、現代のニューギニア・ピジン語、ベトナム語、マルタ語、パンジャビ語、チェコ語、ポルトガル語、ルーマニア語、本学で研究されているイテリメン語等に於いても、yes/no疑問文は音調(ストレス・アクセント含む)のみよって作られている。[註14] 疑問文の文の構造は、平叙文と同じである。従って、文型が「定着」していなかった古典語でyes/no疑問文を作る場合、

- ① 古典ギリシア語のように音調を用いるか、或いは、
- ② 古典ラテン語のように“-ne,” “nonne,” “num”などや日本語の「～か」の如く小辞・副詞・助詞を用いるしか、方法がなかった。

中国語には、音調と、文末に置く「嗎」(日本語「～か」)と、文頭に置く「是不是」(日本語「であるかでないか～」)によるyes/no疑問文がある。動詞・助動詞の倒置による疑問文は無い。一覧表にして示す。倒置疑問文は、文型が定着した英語と仏語のみに可能である。

	音調	「～か」	倒置	Wh	Wh文頭	文型
ギリシア語	○	×	×	○	自由	自由
ラテン語	○	○	×	○	自由	自由
英語	○	×	○	○	定着	定着
仏語	○	×	○	○	定着	定着
中国語	○	○	×	○	自由	定着
日本語	○	○	×	○	自由	自由

更に、手話について考えて見る。手話は、生成文法では、音声と同様の言語の周辺的な外在化の手段であるとされる。手話における英語のyes/no疑問文は、文頭で「眉を動かすこと」によって示される。これは、日本語の「～か？」ラテン語の“-ne,” “nonne,” “num”などに相当する語を手話文の文頭に置いて、それを手話の動作で表現している。手話は音調を再現しているのではない。日本語の「～か？」ラテン語の“-ne,” “nonne,” “num”などを翻訳しているのである。一方、音調は手話と異なり、何も翻訳していない。音調のみで、同一構文を平常文にしたり疑問文にしたりする力がある。音調は、手話と同一範疇の



原文は、どの文型でも成立する。基底生成も障壁も何もない。単なる順列組合せである。また、人称代名詞二人称単数対格 *te* (=you) を人称疑問代名詞男性単数対格 *quem* (= whom) に換えれば、用例の多寡はあるが、その位置のままで *Wh* 疑問文になる。

- 註 6. 久野暉・高見健一、2004、『謎解きの英文法』、くろしお出版、pp.149-169 では、*there* は、形式上の「主語」と説明され、その後に来る名詞は「意味上の主語」とされている。これは、形式上の主語ではなく存在表現の副詞と考える。
- 註 7. 安井稔、1978、『新しい聞き手の文法』、大修館書店、p.170
- 註 8. 小野隆啓監修、2004、『英語の構造』金星堂、pp.223-244  
森田貞夫・三川基好・小島謙一、1988、『古英語文法』、大学書林、pp.91-92  
市河三喜・松波有、1986、『古英語・中英語初歩』、研究社、pp.59-61  
中尾俊夫・寺島廸子、1988、『図説 英語史入門』、大修館
- 註 9. 生成文法による通時的な「移動の事例研究」については、渡辺明、2005、『ミニマリストプログラム序説』大修館書店、第7章にて「古代日本語の *WH* 移動」が論じられている。また、縄田裕幸、2011、『極小主義における通時的パラメーター変化に関する覚書』、島根大学教育学部紀要第45巻 pp.78-80 にて、「英語史における動詞移動の喪失」が考察されている。
- 註 10. 梶田優、2003、名古屋大学に於ける講演「動的文法理論の考え方と事例研究」の中で、「*all the people, too tall a boy* は、なぜ *the all people, a too tall boy* の語順にならないのか？」の検討がなされている。音韻論的な解決の模索にとどまっている。古典ギリシア語に遡れば、統辞論的に解明できるように思われる。参考文献の該当箇所を示す。田中・松平、1962、『ギリシア語入門』岩波全書、p.29
- 註 11. 松本克己、2007、『世界言語の中の日本語』三省堂、pp.173-174  
「古い中国語 --- その背後にクレオール化と呼んでもよいようなはげしい言語接触が起こったことを推定させるに十分である。」とのこと。日本語は、そうではない。
- 註 12. 引用例文については、樋口勝彦・藤井昇、1963、『詳解ラテン文法』研究社、岩崎務、2001、『ニューエクスプレス・ラテン語』白水社、を参照した。
- 註 13. 市河三喜・松波有、1986、『古英語・中英語初歩』研究社、pp.65-66  
中尾俊夫・寺島廸子、1988、『図説 英語史入門』大修館、受動態の確立は 14C 頃。
- 註 14. 水野義明、1978、「一般疑問文について」、『明治大学教養論集』  
中川裕監修、2009、ニューエクスプレス・スペシャル『日本語の隣人たち』白水社、所収論文・小野智香子「イテリメン語の世界」p. 78 に、疑問文の記述がある。

#### [参考文献]

- Chomsky, Noam, (2015): 'Problems of Projection,' *Structures, Strategies and Beyond*, John Benjamins Publishing Amsterdam/Philadelphia.
- Chomsky, Noam. (2015b), *What kind of CREATURES are we ?* Columbia U. Press
- Kitahara, Hisatsugu. (1997), *Elementary Operations and Optimal Derivations*, MIT Press
- BALLY et SECHEHAYE, (1971), *Saussure /Cours de Linguistique Générale*, PAYOT
- 安藤貞雄・小野隆啓、(1993)、『生成文法用語辞典』大修館書店
- 池内正幸、(2010)、『ひとのことばの起源と進化』開拓社
- 杉崎敏司、(2015)、『はじめての言語獲得』岩波書店
- 互盛夫、(2014)、『言語起源論の系譜』講談社
- 中村捷・金子義明・菊池朗、(2001)、『生成文法の新展開』研究社
- 原口庄輔・中村捷編、(1992)、『チョムスキー理論辞典』研究社
- 藤田・福井・遊佐・池内、(2014)、『言語の設計・発達・進化』大修館書店
- 福井直樹・辻子美保子編訳、(2015)、『我々はどのような生き物なのか?』岩波書店
- 宮本陽一、(2009)、『生成文法の展開』大阪大学出版会
- 渡辺明、(2009)、『生成文法』東京大学出版会